

全国学力調査問題の検討 3

2018年 小学・国語B 3の検討

加藤郁夫（読み研運営委員）

前回は述べたことだが、この問題でも湯川秀樹「旅人」の一部の引用がネット上では空白になっている。著作権の問題もあると思うが、問題を誰もが見ることができる環境を作るという配慮がほしいと思う。

検討したいのは、「一」の問題である。「山下さんはどのようなことが知りたくて次の文章を読みましたか。その説明として最も適切なものを、あとの1から4までの中から一つ選ぶ問題である。

空白にされている、「旅人」の部分を下に示す。

先生は端然と、はかまをはいてすわっていた。私たちが座敷に出ると、いつも先生の方から先にお辞儀をされる。男の兄弟たちは、だいぶ、へきえきしたらしい。何時とはなく、次第にけいこをやめてしまった。が、私だけは長くつづいた。

「あなたが一番上手です」という先生の言葉に、おだてられた気味もないとはいえないが、私一流の辛抱づよさが、いったん始めたことをなかなか捨てさせなかったということもあった。

まず気になるのは、「山下さんはどのようなことが知りたくて」とあるが、この言い方では「旅人」を読む動機を聞いていることになる。「旅人」を読んで、知りたいことがわかったかどうかは、問題文を読む限り問われてはいないのである。

このような問題では、知りたいことが「旅人」を読むことでわかったととらえるのが普通なのだ、と言われるかもしれない。しかし、小学6年生対象の問題ならば、そのような誤解がないようにたとえば次のような問い方をすべきであった。

「山下さんはあることが知りたくて次の文章を読み、納得しました。どのようなことが知りたかったのでしょうか。～」

山下さんが何を知りたかったかというだけでは、それは山下さんに聞いてみないことにはわからない。問い方が雑であり、問題の質を低くしている。

それでは、選択肢を検討していこう。まず、「3 湯川博士がどのような研究に取り組んでいたのか。」は除外できる。湯川博士の子ども時代の話であることから、この選択肢は対象外である。

残り3つは、難しい。伝記「湯川秀樹」の一節は次のようである。

A 小学校に入る前から高校のはじめころまで書道を習っていた。最初は兄弟姉妹の全員が習っていたが、兄たちはいつの間にかやめてしまった。だが、湯川博士は習い続け、様々な書き方を身につけた。

ここから山下さんが何を知りたいと考えたのだろうか。なぜ、兄たちがやめたのに湯川博士だけは続けたのか。どのような書き方を身につけたのか。そのあたりが、私には想像される。

残り3つの選択肢について考えていこう。

- 1 湯川博士が自分自身をどのように思っていたのか。
- 2 湯川博士がどのような書き方を身につけたのか。
- 4 湯川博士の兄弟姉妹はどのような様子だったのか。

「山下さんはどのようなことが知りたくて」という問いだけからいえば、3つとも誤りとする理由は

見えてこない。

「最も適切なものを～一つ選んで」とあるのだから、誤りとする理由はなくとも、「最も適切なもの」を選べばよいと言われるかもしれない。しかし、それぞれの選択肢が誤りである理由がきちんと説明できないようでは、問題として不十分であると言わざるを得ない。

「2」に関わる「書き方」が、「旅人」の方には一切出てこないことから、「2」は除外できそうである。

「4」はどうか。「男の兄弟たちは、だいぶ、へきえきしたらしい。何時とはなく、次第にけいこをやめてしまった。」と様子を述べている部分がある。その意味では、「4」でもよさそうである。少なくとも、「4」を誤答とする積極的な理由は私には見当たらない。強いて考えるならば、湯川博士について知ろうとしているのだから、その兄弟姉妹のことを知りたかったとするのは、横道になり、誤りとなる、くらいだろうか。(一方で、湯川博士の兄弟姉妹のことを知ることで、湯川博士のことが見えてくるという理屈も成り立つのだが。)

「正解」は「1」なのだが、この答えも私にはすっきりしない。「自分自身をどのように思っていたのか」とは、どういうことなのだろうか。

なぜ、兄たちがやめたのに湯川博士だけは書道を続けたのか、ということに関わっているのだろうが、子ども時代の湯川博士がその当時自分のことをどのように思っていたのか、ということなのか。それとも、後になって振り返って、湯川博士は書道を続けたことをどのように思っていたのか、ということなのか。

「あなたが一番上手です」という先生の言葉に、おだてられたきみもないとはいえないが、私一流の辛抱づよさが、いったん始めたことをなかなか捨てさせなかったということもあった。

「旅人」の文章を読む限り、その当時の自己評価ではなく、後になって振り返っての自己評価のように読めるのだがどうだろうか。そもそも、小学生～高校生にかけての年齢の者が自分のことを辛抱づよいと認識しているというのは、あまり一般的ではないだろう。

「山下さんはどのようなことが知りたくて次の文章を読みましたか。」の山下さんの問いが、「湯川博士が自分自身をどのように思っていたのか」というのでは、すっきりしない。先に引用した伝記「A」の下に、山下さんの思ったことが次のように述べられている。

続けることは大変だけれど大切だ。わたしは水泳を習っている。やめたいと何度も思ったが、続けたことで、長く泳げるようになった。

山下さんの関心は、続けることにあるようだ。だとすれば、「湯川博士が自分自身をどのように思っていたのか」ではなく、「湯川博士はどのようにして書道を習い続けたのか」といった問いの方が自然ではないか。ただ、そうなると、答えがあまりにも見え見えになってしまうから「湯川博士が自分自身をどのように思っていたのか」としたのであろう。

しかし、この両者は等しくない。「湯川博士はどのようにして書道を習い続けたのか」は書道を続けた理由を問うている。その答えが、湯川博士自身の中にある場合と湯川博士の周りの環境や条件などにある場合とある。「湯川博士が自分自身をどのように思っていたのか」は、湯川博士の自己認識を問うもので、はじめから書道を続けた理由は湯川博士の内面的な問題だと決めつけなければ出てこない問いである。

選択肢「3 湯川博士がどのような研究に取り組んでいたのか。」がまず除外される。次に、山下さんは書き方に関心を示していないようだからということで選択肢「2 湯川博士がどのような書き方を身につけたのか。」が除かれる。湯川博士のことを知ろうとしているのだから選択肢「4 湯川博士の兄弟姉妹はどのような様子だったのか。」が除かれる。残るのは「1 湯川博士が自分自身をどのよう

に思っていたのか。」という道筋になると思われる。

しかしここまで見てきたように、「1」である理由を積極的に支える理由も弱ければ、「4」がなぜ誤りなのかを説明する理由も弱い。正解はどれかと子どもたちを混乱させることはできても、論理的な思考で正解を導き出す問題としては不十分だと私は考える。